法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

アメリカ文学にみるユダヤ人像(その4)

河野, 徹

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
108
(開始ページ / Start Page)
87
(終了ページ / End Page)
120
(発行年 / Year)
1999-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004882

Hosei University Repository

アメリカ文学にみるユダヤ人像（その4）

河　野　　徹

1．『ソフィーの選択』（スタイロン）

ロベール・フォリソン，アーサー・バッツ，デイヴィッド・アーヴィングといったホロコーストあるいはガス室否定論者の説が，西岡昌紀という神経内科医を介して文芸春秋刊行の『マルコポーロ』1995年2月号に，旧套を破る問題提起として紹介されたとき，ユダヤ系自衛組織の一環をなすサイモン・ウィーゼンソール・センターは，フォルクスワーゲン，マイクロソフトほか世界的大企業に文春系刊行物への広告掲載を一切差し止めるように訴え，たちまち『マルコポーロ』を廃刊に追い込んだばかりか，文春社長まで辞任を余儀なくされた。西岡論文の類を敢えて掲載し，一言の反論もなしに幕を下ろしてしまった同誌編集長の不見識もさることながら，日本の一部メディアは，ウィーゼンソール・センター側の高飛車な経済制裁が，国民の対ユダヤ感情を悪化させるだけでなく，自由なホロコースト論議をタブー化させるおそれありとして反発した[(1)]。たしかにウィーゼンソール・センターは，抗議だけでなく説得や啓蒙にも当たる機関だから，経済制裁よりも，『マルコポーロ』誌上で堂々と反論を展開して，読者を納得させるべきであったのかもしれない。しかし同センターは，ネオナチ系の「歴史修正主義協会」などと同じ土俵上で論争すれば，相手側にも一理ありという印象を与えることを憂慮して，反ユダヤ主義団体との直接論争は避けている。それにしても，ガス室の存在を否定しようとした西岡論文が，ユダヤ側をあのような躍起の抗議に立ち上がらせたのはなぜか。

世界中の離散ユダヤ人は，1948年のイスラエル国誕生まで，いかなる国でも政治的，文化的実権を握ったことがなかった。建国後イスラエルが幾多の生存危機を乗り越えながら，現在のような強国に成長した逞しさは，たえず陰影の中で忍従を強いられるという従来の離散ユダヤ人像を払拭するに十分であった。彼らにとって，イスラエルは聖地であるのみならず，民族的矜持の源泉と

Hosei University Repository

なった。そのイスラエルの独立が，第2次大戦中ナチの「最終的解決」で殺戮されたユダヤ人犠牲者にたいする戦勝国側の同情に大きく依存していたことは否めない。換言すれば，ホロコースト犠牲者の命で購われたのがこの国である。善と悪が絡み合う例として，イスラエルとホロコーストほど不気味な組み合わせはない。ヒトラーがいなかったら，ホロコーストはなかったであろうし，ホロコーストがなかったら，イスラエルもなかった，つまりヒトラーは，イスラエル建国の父となってしまうわけだ[(2)]。もちろん被害者たるユダヤ人にとって，このようなシニシズムは冒瀆だ。戦時下の日本が靖国神社に祀って慰霊したのは戦没将兵に限られたが，イスラエルは反ナチ闘争の英雄だけでなくすべてのユダヤ系ホロコースト犠牲者を「ヤド・ヴァシェム」に祀って慰霊する[(3)]。ホロコーストの教訓は，何よりもその再発への危機意識で，慰霊は再発防止のための民族的団結を新たに誓うことで遂げられる。そこにユダヤ的特殊性を強調する神学的解釈が生じるのは当然だろう。

きわめてユダヤ中心主義的なその類の解釈に，ユダヤ人以外のホロコースト犠牲者が入り込む余地などない。エミール・ファケンハイムの論集『歴史における神の現存』によれば，シナイに臨在した神はアウシュヴィッツにも臨在したわけで，ホロコーストは人間の力ではどうにもならない神意だから，いくらナチに抵抗しても詮無いことであったし，ユダヤ民族の義務は，ヒトラーの思惑を実現させてしまわないように，あくまでもユダヤ人として生存を続けることなのである。作戦上の支障を度外視してまでユダヤ人の輸送収容を優先させたことからも分かるように，ホロコーストは，戦争心理を超えた純粋反ユダヤ主義の所産，つまり「純粋イデオロギーから生じた計画であり，絶滅のための絶滅，殺害のための殺害，悪のための悪であった[(4)]」とファンケンハイムがいうのも，貪欲，憎悪，異人恐怖など人間的動機に端を発する一般のジェノサイドから，あくまでもユダヤ人のホロコーストを切り離そうとする選民意識の表れだろう。選民といっても，生きるためでなく死ぬために選ばれるのだから，一種の厭世思想につながり，神秘主義的不可解の度をいっそう深めてしまう。死ぬために選ばれたのは，ユダヤ人だけでなく，ジプシーもポーランド人もその他のスラヴ系諸民族も同様だった。ヨーロッパにおけるユダヤ人抹殺率60％というのは，確かに未曾有だが，アルメニア人の50％，カンボジア人の40％と比較を絶するわけではない。

スタイロンが，『ソフィーの選択』と関連した対話のなかで，ガス室で処刑

Hosei University Repository

されたユダヤ人は250万人，非ユダヤ人は100万人という事実を強調し[5]，またこの作品の中で，メッセージといえるものがあるとしたら，その一つは，ナチが実際に誰も彼をも殺したということだ，と断言しているのも，まさに出身民族の如何でホロコースト犠牲者を区別すべきでない，と確信しているからだ。「彼らは真っ先にそしてとりわけユダヤ人を手にかけました。しかし，このように恐ろしく，このように完全に悪に染まったことは，他のすべての人に，少なくとも後遺症的な影響を及ぼさずにはいないのです。その辺が，ホロコーストに関するユダヤ人のまったく独占的な考え方の主たる弱点と思われます。この企ての規模の大きさからして，苦悩は普遍的たらざるを得なかったのです[6]。」民族意識を理論に押し付けるべきではなく，むしろ理論を諸民族の現実に適合させるべきだ，とスタイロンは説いているのだ。

同様の思念を抱くユダヤ系知識人も，決して少なくはない。ユダヤ系神学者の中にさえ，ユダヤ的特殊性への執着を好ましく思わないリチャード・ルビンスタインのようなリベラルがいる。彼は，ラビの身でありながら，ホロコーストを黙認した神がもはや信じられず，「神は死んだ」と唱える一派の仲間入りをする。彼は自著『歴史の狡計』の中で，アウシュヴィッツを，西欧社会の伝統的奴隷制度が必然的に延長したものと断じており，さらにアウシュヴィッツ的悪と類似した現象は，合衆国内にも遍在することを実証した。たとえば24州内50箇所の監獄で，１ドルの報酬と引き換えに医学実験が行われており，応募した囚人の中には不治の損傷を被ったり，一命を落とす者さえいるという。アメリカのある著名な科学者が「囚人はいい実験材料だ，それにチンパンジーよりも安上がりだし」と言ったそうだ[7]。たしかにこの科学者とアウシュヴィッツの「死の天使」メンゲレとは，どこかでつながっている。

スタイロンが『歴史の狡計』に寄せた序文のなかでふれているように，ルビンスタインの普遍主義的思考は，ユダヤ人一般の賛同を得るに至らなかった。やはりユダヤ人にとってホロコーストは，他との比較を絶していなければならないのだ。ファケンハイムは，戦前戦中を通じて世界中がヒトラーの反ユダヤ主義に操られ，「無用の徒」ユダヤ人の入国を許さず，連合軍もアウシュヴィッツに通じる鉄道を爆撃しなかった，つまりホロコーストは地域的でなく，世界的な出来事であった，と述べる[8]。ユダヤ人以外を巻き込んだジェノサイドは地域的な出来事に過ぎないといわんばかりだが，同様のユダヤ中心主義的史観は，ユダヤ系歴史家の間にも見出せる。ユダヤ系アメリカ人に関する権威あ

Hosei University Repository

る通史『アメリカにおけるシオン』の著者ヘンリー・ファインゴールドが，ホロコースト研究誌『ショアー』（*SHOAH*）のなかで，「歴史は民主的なものではない，歴史は似通った出来事に平等の重要性を与えはしない」と書いている[9]。この説はヨーロッパ史偏向で，それにユダヤ中心主義的解釈が加わっている。「似通った」出来事に平等の重要性を与えないのは，歴史そのものでなく，民族中心主義的価値観に縛られた歴史家の方だろう。

『パーティザン・レヴュー』1985年第3号に掲載されたイスラエル作家ギデオン・テルパズとスタイロンの対談でも，「アウシュヴィッツの意味が分かるのは，アウシュヴィッツの生存者だけだ」というウィーゼルの主張が問題になっていた[10]。この対談が行われる4年前に，筆者（河野）はウィーゼルを訪れ，いくつか質問を呈している。彼の『夜明け』（*Dawn*）という作品は，イスラエル独立前夜，反英テロ組織に属する少年が，人質として捕らえた英軍将校を射殺するように命じられ，憎悪をまったく感じないこの相手にどう対処すべきか悩みに悩むという筋で，そのジレンマを話題にした。「あの少年同様，ドイツ軍兵士の中にも，ユダヤ人の処刑を命じられて悩んだ者はいたでしょうね」――こう尋ねたら，彼は一瞬引き締まった顔になり，ただ一語「ノー」と答えた。おそらくわたしは，戦後ドイツの反戦的な映画，小説の類を思い描いていたのだろう。会見後，彼の根深いドイツ人不信をさらに考え直してみた。

アウシュヴィッツやブーヘンヴァルトの生地獄を描いてホロコースト文学の原点となった彼の第一作『夜』（*Night*）を読めば，ユダヤ人にとってホロコーストが，他民族に降りかかった迫害とは比較を絶する，つまり「絶対的」で「特殊な」体験となった所以は察しがつく。エッセイ「一世代を経て」のなかで，彼はこう述べる――「アイヒマンの正常な容貌と言動に私は動揺した……もし彼が正気なら，私は狂気を選ぶべきだと思った[11]」またエッセイ「今日のユダヤ青年に与う」では，「アウシュヴィッツがなかったら，ヒロシマも，アフリカにおけるジェノサイドもなかっただろう[12]」という預言者的な断定を下す。つまりアウシュヴィッツで人間の非人間化が完成され，以後人類の未来は呪われて不具になったと説く。忘れること，赦すことを求める安易なリベラリズムに流されてはいけない，迫害者か，さもなくば犠牲者の道を選ばなければならない人間にとって，愛と愛を拒むものとの結合は無理な相談なのだ，とも言う。わたしが耳にした「ノー」の一語には，少なくともこれだけの意味が含まれていたことになろう。たしかにウィーゼルは，ホロコーストを全人類

Hosei University Repository

の悲惨と結びつけているけれども，他のジェノサイドは所詮アウシュヴィッツの副産物でしかない，というニュアンスがどうしても残る。

上記『パーティザン・レヴュー』の対談で，スタイロンはまずホロコーストの神聖不可侵性を否定し，「余人がそれを扱うのは差し控えよ」というウィーゼルの主張に対して，南北戦争をテーマにした文学の最高傑作は『赤い武功章』だけれども，作家のスティーヴン・クレインは，戦闘体験が皆無で，書物から得た知識をもとに純然たる想像で書き上げたのだ，と反論する。「ホロコーストを普遍化，つまり非ユダヤ（'dejudify'）することは，それを平凡化することである。最近のドラマ，ドキュドラマ，ミュージカルは，犠牲者よりも迫害者の方を＜人間化＞し，観衆に憐れみと理解を求めがちだ」というウィーゼルの非難に対して，スタイロンは，「まさにわれわれ同様，彼ら迫害者も人間であったから，あのように恐るべきことができたのだ」と応じ，テルパズも，アウシュヴィッツ生存者で作家のカッツァトニクが，アイヒマン裁判の証言席で失神したのは，「アイヒマンを見たせいでも，あの惨禍のせいでもない。突然アイヒマンが自分に，また自分がアイヒマンになり得ることを実感したからだ」というカッツァトニク自身の述懐を紹介している。しかしテルパズ自身は，「ユダヤ人として，ホロコーストを＜普遍的＞な視点からみることはできそうにない。一生独断を持ちつづけることでしょう」と言い足している。特殊化され絶対化されたホロコーストの神学的意味は，ユダヤ人の胸奥に秘められた一種の固定観念であり，なおざりにはできまい。しかしその観念を心底から共有はできない非ユダヤ人としては，ホロコーストを，他のジェノサイドと隔絶せず，あくまでも権力悪の犠牲とみなし，その中でも際立って主要な犠牲者としてユダヤ人を理解するしかあるまい。反ユダヤ主義の延長としてのみホロコーストを捉えるのでは，その悪の全体主義的次元が見えてこない，というのがスタイロンの考え方だろう。

ユダヤ人生存者を代表してホロコーストのユダヤ的特殊性を強調してきたウィーゼルにとって，非ユダヤ人，しかもポーランドという反ユダヤ的傾向が著しい国の女性をアウシュヴィッツの生存者に仕立てた『ソフィーの選択』は，腹に据えかねたことだろう。ウィーゼルは，ユダヤ神秘主義に関する一連の著述を刊行したほどのスピリチュアリストであり，「わたしは，イスラエル国民とイスラエル国にたいへん恩義を感じているので，同族たる彼らを審判する気には全然なれない」と言明して[13]，イスラエル国の政策について批評機能を

Hosei University Repository

停止させたユダヤ・ナショナリストでもある。アーヴィング・ハウの言うとおり，「ユダヤ人に最も身近なものを除いて，一切の不正を最も雄弁に物語る」作家なのだ[14]。彼が「想像不可能なことを想像する」スタイロンを座視できなかったのは当然といえる。ここで連想されるのは，スタイロンの第四作『ナット・ターナーの告白』を「人種主義的」として非難した10人の黒人批評家たちである。ユダヤ人のことはユダヤ人にしか分からぬと信じ込んでいるのがユダヤ・ナショナリストなら，黒人の宗教，言語，心理が白人に分かってたまるか，と息巻くのがブラック・ナショナリストだろう。

スタイロンは，実録「ナット・ターナーの告白」を下敷きとして，処刑される前のナットに一人称で反乱の一部始終を語らせている。1831年ヴァージニア州で数名の黒人奴隷を誘って反乱を起こし，白人55名を殺戮したとされるナット・ターナーだが，アメリカの黒人が温存してきた伝説的英雄としてのナット像には歴史的根拠がなく，そこにスタイロンは想像力介入の余地を見出した。実録を歪曲するのでなく，そこから想像し得るかぎりの実存的ナット像を作り上げようとした。強靱な革命家ではなく，むしろ臆病者で，実録の告白によっても，二日間の反乱を通じて一人の白人娘しか殺していない。それもかねてから憧れ，欲情の対象だった娘をである。白人の男性たちは会合に出かけて不在という設定だから，叛徒らが殺したのは女子供だけである。妻帯もせず，自慰に耽り，同性愛の傾向もあったとされ，神憑りで決起したものの，神に見捨てられ，いまでは自分にたかる獄中の蠅みたいな存在だ，と感じている。ナットは処刑直前に，自分が殺した白人娘と，情交を通じて一体化した幻想に駆られる。黒人問題は，反乱によってではなく，情交によって黒人と白人が一つに結ばれることで解決する，という暗示だろうか。

『ウィリアム・スタイロンのナット・ターナー――黒人作家10人の反応』は，1968年というブラック・パワー興隆の時期とも重なって，スタイロンの人種主義的底意のみを抉り出し，「黒人の歴史に残る英雄を操り，弄んだ」ことに憤激を注いだものであった[15]。ナットの伝説的な革命家像を維持しようとすれば，黒人の歴史は黒人の経験を嘗めた者だけの領域であり財産である，という立場を貫くしかない。スタイロンは「代償を払わないでブルースを歌おうとする男」（J. O. キレンズ）と蔑まれ，「黒人と白人の歴史にもう一発白っぽい血清をぶちこんだ」（J. A. ウィリアムズ）と謗られた。スタイロンを弁護した側の代表として，フィリップ・レオンの評論「尨大な非人間化」から一節を引い

Hosei University Repository

てみる――「黒人奴隷の意識に入り込もうとする白人作家の試みを拒むということは，ジェイムズ・ボールドウィンに向かって，君が白人の意識を理解することは不可能だから，黒人のことだけを書いていろ，というに等しい[16]。」

「尨大な非人間化」という表題は，スタイロンの問題意識を言い得て妙である。彼の胸中では，売られて川を下って行く黒人奴隷の一群と，同じく家畜のように貨物列車で死の収容所へ運ばれて行く囚人たちが，互いに共鳴し合っているのだろう。「アメリカ南部でもポーランドでも，人種の観念が延々と持続して，残酷と同情，偏狭と理解，敵意と仲間意識，搾取と犠牲，身を焦がすような憎悪と見込みのない愛を同時に生み出してきた。対立するこれらの状態のうち，優勢だったのはあらかたより暗く，より醜い方だったかもしれぬ。しかし，ポズナニ（ポーランド西部）であれヤズー・シティー（ミシシッピー州）であれ，長い歴史を通じて品位と名誉が，しばしば不利な条件に抗して，君臨する悪の絶対的支配を覆せることも時としてあったということを，記録して置かなければならない[17]。」スタイロンが，わざわざ奴隷制とかホロコーストとか，歴史上でも恐ろしい時期のことを敢えて題材に選んだのは，人間内奥の「品位と名誉」にかけた彼の希望の表れだろうか。『ナット・ターナーの告白』のテーマは，裏切りだともいえる。何よりもナットは，忠誠を尽くしたのに結局は自分を売りに出した主人に裏切られたし，神憑り的な幻想を起こさせた聖書に裏切られた。『ソフィーの選択』のなかでも，理解を超えた一種の形而上的な裏切り，人類に対する裏切りが背景にある。「尨大な非人間化」は，奴隷制であれ，ナチ体制であれ，人道を徹底的に裏切っておきながら，被支配者側からの裏切り，不服従は絶対に許さなかった。その尨大な悪の循環系統に押し流されてではあったが，ソフィー自らも悪の「選択」を迫られ，その贖いとして死願望の境地に至る。スエーデンの難民収容所に移されたソフィーは，手首を切って実際に自殺を図る。その死願望の原因となった「選択」の真相を探るプロセスが，この作品のプロットでもある。ソフィーが最後まで口に出せなかった「選択」とは何か。

この小説は，アウシュヴィッツ生存者たるカトリックのポーランド女性ソフィー・ザヴィストウスカが歩んだ悲劇的な一生を跡づけることによって，ホロコーストが人間の歴史，道徳，心理に及ぼした計り知れない影響を探ろうとしたものだ。時代背景は1940年代後半，つまり終戦後のアメリカで，南部出身の駆け出し作家スティンゴが，若き日のスタイロンの分身として語り手をつとめ

Hosei University Repository

る。彼は大出版社の閲読係を辞め，ユダヤ系の人々が多く住むブルックリン区フラットブッシュの下宿屋にこもって，第一作を世に出そうと張り切っている。彼は，頭上の一室で狂った野獣さながらの性交に耽る男女，ネイサンとソフィーを当初は呪詛するが，やがてネイサンの教養，ソフィーの美貌，そして二人の人柄の良さに惹かれて親しい間柄となる。ネイサン・ランダウは，頭脳明敏だが情緒不安定なユダヤ人で，目下ノーベル賞級の研究を進めているハーヴァード出の生物学者だと自称する（実は大学でなく，精神病院に入院を繰り返してきた妄想性精神分裂病患者だ)。その肉体美でスティンゴを悩殺したソフィー・ザヴィストウスカは，渡米後日も浅く英語に難渋しているが，クラシック音楽や現代文学を心の糧とし，何事につけ献身的な性格で，終始若き南部人を魅了してやまない。腕に収容所時代の囚人番号が刺青されており，ともすると表情に影がさす。

緩解期のネイサンは，優しくて気前の好い理想的な愛人だが，いったん再発して妄想に取りつかれると，ソフィーの不倫を疑って，殴る蹴るの暴行を加え，アウシュヴィッツで生き残れたのはなぜだ，と詰問する。スティンゴまでソフィーとの関係を怪しまれ，身の危険を覚えた二人は，南部へ向かい，途中ワシントンのホテルに投宿する。その夜ついにソフィーは，どうしても明かせなかった「選択」の秘密を告白する。アウシュヴィッツ到着時の選別で，親衛隊の軍医は，息子ヤンと娘エヴァのどちらかを生かしてやるからこの場で決めろ，もし決められないなら二人ともガス室行きだと脅した。やむなくヤンの方を「選び」エヴァを捨てたことで，以来罪悪感に苛まれてきたというのだ。ネイサンとの激しい情交はその苦悶を鎮めてくれたし，ネイサンの打擲も「罪」への報いとして受け止めたのだろう。「告白」のあとソフィーはスティンゴの愛を求め，若者はここに晴れて大人の仲間入りをする。故郷の農園でソフィーと結婚生活に入るつもりでいたスティンゴは，翌朝「やはりネイサンを愛しています。でも，人生も神もにくい」というソフィーの書置きをみつけて愕然とする。ブルックリンの下宿にとって返したが，カップルはすでに服毒自殺を遂げていた。ソフィーは，ネイサンかスティンゴか，という最後の選択でネイサンを選んだ。わが子を死地へ追いやった罪は，やはり死によってしか贖えなかったからだ。

ユダヤ人でもなく，抵抗運動に加わってもいなかったソフィーが，なぜアウシュヴィッツへ送られたのか。肺を病んでいた母親に食べさせようと禁制品の

Hosei University Repository

ハムを持ち運んでいて，ドイツ軍の一斉捜査の網にかかってしまったのである。クラクーフのヤギェウォ大学で法学部教授だった父親は，ポーランド知識人の一掃を図ったナチの手ですでに殺されていた。ソフィーの思い出話は，保身のための嘘で固められていたが，父親の前歴についてもしかりであった。ユダヤ人三家族をコサック兵の虐殺から救ったほどのリベラルだとふれこんでいたが，実はナチに劣らず反ユダヤ主義的で，ナチが「最終的解決」を打ち出す前に，「ポーランドのユダヤ人問題」という論文のなかで，ユダヤ人の「絶滅」（'Vernichtung'）を唱えていた。父の速記者兼タイピストだったソフィーは，国際的反ユダヤ主義者ヒューストン・チェンバレンを当時の英国首相ネヴィル・チェンバレンと混同し，父と夫から軽蔑される。この夫も同じ大学の数学教授で，父とともにザクセンハウゼン収容所で敢え無い最期を遂げた。父は例の力作論文を振りかざして身の「潔白」を訴えたが，徒労であった。その父の遺作を靴底に隠していたソフィーは，秘書として仕えていたアウシュヴィッツ収容所長ルドルフ・ヘスにそれを提示し，自分も父と同じく反ユダヤ主義者であるから，息子のヤンを「ルーベンスボルン（生命の泉）計画」に加え，ドイツ人として養育していただけないかと，肉体を差し出す覚悟で嘆願するが，それは叶えられず，やがてヘスはベルリンへ転勤して，ソフィーはまた一般棟に差し戻される。

ソフィーが最期まで隠し通した「選択」は，この作品の中心的メタファーでもあった。『五本の煙突』の著者オルガ・レンゲルは，ソフィーのような選択は強いられなかったが，二人の子供の年齢を偽ったために，二人ともガス室へ連れて行かれた。またハナ・アーレント著『エルサレムのアイヒマン』には，ソフィー同様の選択を命じられて，子供の一人を失ってしまうジプシーの母親のことが述べてある。スタイロンはこの二件の「選択」から，ナチの暴虐が組織的であるとともに信じがたいほど恣意的で，これこそ歴史上最も恐るべき悪のメタファーだ，という結論に到達し，実際これが，『ソフィーの選択』執筆のライトモティーフになった[18]。若き日のスティンゴは，ソフィーが彼に求めた情交の真意，つまり「告白」に伴う苦悩の癒しであったことを悟れず，さらにはネイサンが，彼女を心底から愛し抜いた救い主として，また彼女の良心を責め立てる鬼として，二重の役割を果たしていたことにも気づかなかった。作家として大成した30年後のスティンゴは，もしあの時ソフィーの真情を理解していたら，あれほど悲劇的な結果には至らなかったかもしれない，と唇を噛

Hosei University Repository

むのだ。

この作品に描かれたユダヤ人像として興味深いのは，まずソフィーの友人で抵抗運動を率いるポーランド女性ワンダが，アジトを訪れたユダヤ・ゲットー代表に述べたポーランド人とユダヤ人の比較である。ポーランド人が燃えているビルの中のネズミだとしたら，ユダヤ人は樽に押し込められたネズミで，親近感などまったく持てないそんなユダヤ人への関心を，ポーランド人に期待できるか，というのである[19]。ナチ支配地域でのユダヤ人と非ユダヤ人の関係について，これほどみごとな比喩はなかろう。

たしかに非ユダヤ人同士でユダヤ人を話題にすれば，育った環境の中で仕込まれた反ユダヤ的偏見が注ぎ出る。とくにネイサンの暴力に曝されたあとで，ソフィーがスティンゴ相手にぶちまけるユダヤ人罵倒は激しいものだ。「結局ユダヤ人なんて，一皮剝けばみな同じよ。見返りを要求せずにただで物をくれるようなユダヤ人はいないと父が言ってたけど，まったくその通りだわ。ネイサンがそのいい例よ。そりゃあたしによくしてくれたけど，愛情や親切心からだと思う？　ちがうわ，ただあたしを利用して，自分のものにして，セックスして，なぐりたいからよ。ユダヤ人がヨーロッパで嫌われたのも当然よ。クラクーフのことでお話したことはみんな嘘。子供のときからいまでずっとほんとにユダヤ人が嫌いだった。嫌われたってしようがない連中なんだもん。嫌いよ，汚らしいユダヤのブタどもなんか[20]」本当はネイサンに夢中なのに，こんな雑言を吐いているのは，ネイサン自身を責めるよりも，彼のユダヤ性を責める方が気楽だから，ということはスティンゴも承知している。にもかかわらず，彼女の癇癪に先祖がえり的な共感を覚えて，ぼくの薬品戸棚からなけなしの金を盗んだのはきっと同宿のユダ公モリス・フィンクだ，と真っ黒な猜疑心に駆られた。（あとで外部侵入者の仕業と判明。）このフィンクという家主の代理人みたいな男は，下宿の内部事情によく通じていて，ネイサンとソフィーも彼の監視下にある。二人の言い争いにも耳を傾ける。「何度も何度もけったいな質問をするんだ，＜どうやってアウスウィッチを生き延びたんだ＞ってね。これはどういう意味かね。アウスウィッチってなんだい[21]。」このようなユダヤ人がいたとは，到底信じがたい。

『ソフィーの選択』でソフィーが最後に選択するネイサンとは，どういうユダヤ人か。物語の終り近くになって，彼がアンフェタミンとコカインを常用する妄想性精神分裂病患者であることが判明するわけだが，天才と獣性の対照が

Hosei University Repository

あまりにもどぎつくて，そこに必然性を見出しがたいのだ。ネイサンの劇的な狂気は，いわば明暗のメリハリをつける道具立てのようなもので，その狂気が実存的な苦悩でなく，科学的に解明された疾病の結果だと判れば，だれしも興ざめを禁じ得まい。イディッシュの俗語を随所にちりばめるなど，ユダヤ人の特徴を帯びさせる工夫も窺えるし，作者自身がユダヤ系の友人に恵まれていたから，彼らの表情や言動をネイサン像に合成することもできただろう。しかしどことなく不自然で，真に読者を惹きつけるのは，そういうユダヤ民話のゴーレムみたいな怪物に奴隷的な献身をも辞さないソフィーの方だろう。発病期のネイサンがソフィーに加える拷問的暴力は，アウシュヴィッツの延長とも考えられる。しかし，同性に抱きつかれた以外に，収容所のドイツ軍兵士や牢名主的な「カポ」がネイサンほどの乱暴をソフィーに働いたという記述は見当たらない。アウシュヴィッツもネイサンも（少なくとも彼の半面は）狂気の沙汰であり，悪の権化だが，悪という道徳的，宗教的な概念が，狂気という科学的，世俗的なそれに代替されたら，つまり精神異常の病因が科学的に解明されたら，野獣的拷問者といえども要治療の患者となり，単純な悪人扱いは難しくなる。

悪は，他者を排除して唯我独尊を貫徹する支配心理から生ずる。いったんこの心理に沈潜したら，他者に憐れみをかけることは許されない。スタイロンはハナ・アーレントの次の一節を引用する――「問題は，良心を抑えつけるよりもむしろ，相手の肉体的苦痛を目の当たりにして普通の人間が感じる動物的な憐れみの情をいかにして抑えつけるかである。そのコツはきわめて簡単で，おそらく極めて効果的であっただろう。つまり，そういう本能を自分に向けてしまうのだ。殺害者たちは〈なんとむごいことを人々にしてしまったことか〉ではなく，〈義務遂行に当たってなんとむごいことを見ていなければならなかったか，この仕事はなんと重く肩にのしかかったことか〉といっていればよいのだ[22]。」ヘス収容所長もたえず自分自身の苦労，重荷，頭痛に愚痴をこぼしていた。スタイロンはまたシモーヌ・ヴェーユをも引用している――「想像上の悪はロマンチックで多様だが，真の悪は暗黒で，単調で，貧相で，退屈なのだ[23]。」ある種の人間が別種の人間を意のままに支配し，生殺与奪の権を振るう状況は，まさにそういうものかもしれない。

スタイロンの脳裏では，アメリカ南部の奴隷制，暴君的な反ユダヤ主義者だったソフィーの父親，アウシュヴィッツ体制，周期的に発狂して横暴の限りを

Hosei University Repository

尽くすネイサンは，みなひとつの連続体をなしていたことになろう。「文明と野蛮な残忍性を対立項と思うのは誤りで，それどころか，いかなる有機的作用においても，対立項はつねに合一された全体を反映する。そして文明とは，一つの有機的作用なのだ[24]」と述べたのは，『歴史の狡計』の著者リチャード・ルビンスタインで，スタイロンは，同書に全幅的支持の序文を寄せ，しかも『ソフィーの選択』のなかで広範に援用している。「有機的作用」とは，複雑な状況とか思想をさしていると思われるが，その「合一された全体」の本質を劇的に表現しようとすれば，その対立項，つまり分裂症的性格に脚光を当てるほかない。たしかにネイサンは，文明と野蛮な残忍性を合一させた全体のメタファーたり得ている。

過去に当面した数々の「選択」を嘘で固めてきたソフィーは，その結果苦い自己嫌悪に駆られる。反ユダヤ主義を受け入れるべきか，抵抗運動の一員になるべきか，ナチに協力すべきか，そしてヤンとエヴァのどちらを生かすべきか——身を苛まれる思いだったジレンマの一つ一つをまず嘘で隠蔽し，やがて良心の呵責に耐えられず，次々と真相をスティンゴに告白して行く彼女には，一種の気高さがある。ナチ体制の下では，母親がわが子の処刑者とならざるを得なかった。たしかにこれは究極の悪といえるだろう。30年後のスティンゴは，ジョージ・スタイナーのいわゆる「異なる時系列」（'different orders of time'）を痛感させられる。ソフィーが二人の子供とともにアウシュヴィッツに到着したその日，自分は，海兵隊を体重不足ではねられないように，バナナを腹一杯詰め込んでいたのだ。

ユダヤ人はよく，自分たちの所業ゆえでなく，出自ゆえに殺戮されたというが，クラクーフの全大学教員が一網打尽で連行され処刑されたことからも明らかなように，ナチの支配心理からすれば，ゲルマン民族以外は，いずれも処置可能な奴隷民族だった。上述した抵抗運動リーダーのワンダは，ユダヤ人ゲットーの代表者フェルドションにこう付け加えている——「連中は，いったんあなた方を片付けたら，今度はあたしを殺しにやってくるわ[25]。」スタイロンは，『ハシド教徒のホロコースト物語』を著したヤッファ・エリアッハとの対談でソフィーについて感想を求めたところ，「あの選別台に立った数限りないユダヤ人の母親に比べて，同じ台に立ったポーランド人カトリック教徒の母親がどれほどいたでしょうか」と反問された[26]。スタイロンは，別の対談でその答えを出している——「数の上ではその通りで，議論の余地はない。しかし

Hosei University Repository

……何十万，何百万のスラヴ系の人々が苦しんでいた。たしかに彼らは，絶滅作戦の直接対象ではなかったが，病気，拷問，飢餓，医学実験等々でむごたらしく死んだのだ。わたしの論点はまったく簡単で，そういう人々のこともどこかに記録しておくべきだ，ということに尽きる。」ガス室行きとなった人々同様，彼らも正真正銘の奴隷として非業の死を遂げたのである。ナチ・ハンターとして世界的に有名なサイモン・ウィーゼンソールも，「六百万」という数字には独占的な感じが伴う，と気にしていたらしい[27]。

スタイロンは，作品の前半で「ソフィーの理解を試みることによって，アウシュヴィッツの理解を企てることも可能のように思えた」と大胆な宣言をしているが[28]，巻末では，謙虚にその野心を撤回している。「だれであれ，アウシュヴィッツを理解することはないだろう。〈いつの日かソフィーの生と死について書き，そうすることで，どうして絶対悪が世界からけっして消滅しないのか，証明したいものだ。アウシュヴィッツそのものは不可解のままである〉とでも言っていたらより正確だったかもしれない[29]。」『ナット・ターナーの告白』に黒人側から非難が相次いだ前例から，『ソフィーの選択』にもユダヤ側からの猛反発が予想されていた。しかし同作品の映画版についてエリー・ウィーゼルが「想像不可能なことを想像できるのか」と慨嘆した1983年4月17日付けニューヨーク・タイムズ日曜版所載の批判以外は，ユダヤ人，非ユダヤ人を問わず，現代的苦悩の最深部に迫ったこの力作に絶賛を惜しまなかった。

2．黒人のユダヤ人観とユダヤ人の黒人観

ジェイムズ・ボールドウィン，エドワード・ウォラント，ソール・ベロー，バーナード・マラマッド

2.1. ジェイムズ・ボールドウィン（『アメリカの息子の手記』ほか）

「ユダヤ人がハーレムで目の仇にされるのは，ほかの白人と違った振舞いをするからではなく，しないからだ。黒人とユダヤ人を迫害し抜いてきたキリスト教徒の歴史が，いまやユダヤ人の主な特質をなしている。ユダヤ人は，ずっと以前にキリスト教徒から任された役割をハーレムで果たしつつある。ユダヤ人は，キリスト教徒の汚い仕事をやっているのだ[1]。」これはボールドウィンが彼独特の預言者調で白人，またその同類としてのユダヤ人に反省を迫ってい

Hosei University Repository

る一節である。具体的にユダヤ人は，ハーレムで何をしていたというのか。

エドワード・ウォラント原作の映画「質屋」を念頭に置けば，1950年代から60年代のハーレムでユダヤ人がまだ手広く商売をしていた頃の雰囲気が視覚的に捉めるかもしれない。ボールドウィンの一家は，ずっとユダヤ人のあこぎな家主に悩まされつづけた。法外な家賃を取りながら，家屋の補修は一切しない。店子が黒人で，移動もままならないことを知っているから，そういう仕打ちもできる。肉屋もユダヤ人だった。品質の粗悪な肉を他の地域よりも高く売りつけ，おまけに雑言まで浴びせた。質屋もユダヤ人で，誰よりも嫌われた。目抜きの125丁目で，商人の多くがユダヤ人だったし，1935年の暴動が起こってからやっと黒人にも商売が許された。「暗くなってユダヤ人の店主が施錠し，帰宅する。われわれの金をポケットに収め，ここから何マイルも離れた，われわれには立ち入ることも許されない，きれいな地域へ帰っていくんだな，と苦々しい思いだった[2]。」

心ある白人もいるにはいたが，われわれを搾取していることに変わりはなかった。「学校でも教師の多くはわれわれを軽蔑し，汚らわしく無知な野蛮人とみなしたから，やはり憎まれた。こういう教師の全員がユダヤ人だったわけではなく，悲しいことに，黒人も何人か混じっていたのだ[3]。」アメリカ国内の政治・経済状況が，何もかもユダヤ人によって管理されているとは思えない。「管理しているのはアメリカ人だと思うし，アメリカの黒人が置かれた状況は，この管理の直接の結果である。黒人が反ユダヤ的になるのは避けられないし，また悲しいことに納得も行くのだが，それでこの管理体制を脅かせるわけでもなく，ただそれを固めてしまうだけなのだ。アメリカの劇的状況を管理しているのは，ユダヤ人でなく，キリスト教徒である[4]。」

この論調からして，ボールドウィンの反ユダヤ性はけっして単純ではないことが分かる。たしかにエッセイ「ハーレム・ゲットー」のなかで，ユダヤ人は両義的に捉えられている。年少にして説教師までつとめていた彼は，聖書とくに旧約聖書に詳しく，彼の心眼には，ハーレムの強欲なユダヤ人店主と，その昔エジプトで奴隷として呻吟していたヘブライの民が二重写しになっていた。黒人の多くはキリスト教徒だったから，救世主イエスを殺したのはユダヤ人だという伝統的な教義を疑うことなく，「ユダヤ人といえば，救世主を受け容れ得なかった白い肌の不信心者を総括する名称だった[5]。」当然説教師は，怒れる神が彼らに下した天罰の数々を並べ立てる。その最たる象徴は，何よりも未

Hosei University Repository

来永劫地球上をへめぐっていなければならない「さまよえるユダヤ人」である。しかし，その最も呪うべき悪魔の伝説が，いつの間にやら，黒人の艱難辛苦を生々しく想起させる契機となり，数え上げられたその悪魔の罪は，共和国アメリカの罪になってしまうのである。ここに至って黒人はユダヤ人と完全に共鳴し，ユダヤ人同様自分たちも過酷な奴隷監督の束縛下にあって，モーゼ的英雄に救い出される日を待ち望んでいるのだと思い込む。敬虔な黒人が熱唱する讃美歌，愛誦する説話は，すべて旧約聖書に取材したものだから，その起源はユダヤ的なのである。ユダヤ人が選民なら，自分たちもしかりである。ここで地上と天上を橋渡しする仲介者の役を，イエスが果たす。すべての人に，まずユダヤ人次いで異邦人に，救済の道を開いたのはイエスである。苦悩するイエスと苦悩するユダヤ人が，苦悩する黒人奴隷と合体して一つになる。暗闇の中を歩いていた人々が，ついに光明に包まれる。

新約聖書が光明への転換を根拠づけるものとして利用されたのに反して，黒人の心に希望の火を点し，隷従の歴史を事細かに述べているのは，また復讐を約束し，シオンに選民の座を保証しているのは，やはり旧約聖書の方で，最も謹厳な牧師の一人だったというボールドウィンの継父が愛誦した聖書の一節は，「父よ，彼らをお赦しください。自分が何をしているのか分からないのです」（ルカ，23－34）でなくて，「主のための歌を，異教の地でどうして歌うことができようか」（詩篇，137－4）であった[6]。奴隷制時代この方，黒人は，母乳とともにこのユダヤ人との一体感を受け継いできただけに，小売商，家賃取立人，不動産業者，質屋といったハーレムのユダヤ人との接触はひとしお苦渋に満ちていただろう。ユダヤ人の歴史と宗教観は，正義対邪悪，自由対隷従，光明対暗黒などの問題と無縁ではなかったはずなのに，この連中ときたら，黒人搾取というアメリカ的ビジネスの伝統に従って商売をしている。当然黒人は彼らを圧制者とみなし，心底から憎んだけれども，他方で彼らにたいして慇懃に振舞い，悪意を抱くどころか，ほかのだれよりもユダヤ人のために働きたいのです，と言わんばかりの欺瞞を平気でやっていた。内面の苦渋を隠蔽して，白人そしてユダヤ人が押しつけるパターンに適応して行く演技は，生存に不可欠だった。

黒人とユダヤ人の間には，黒人と白人一般の間に介在するのとはちがった緊張がある。ユダヤ人には苦悩の何たるかが分かっているはずだ，という想定が黒人の胸に秘められていて，普通の白人にはかけようもない期待を，ユダヤ人

Hosei University Repository

にはかけている。ところがユダヤ人自身が不安定な状況にあるから，とてもその期待には応えられない。黒人同様ユダヤ人も，この社会に受け容れられようと可能な限りの手段を尽くし，新来移民の弱みを償うためにここを先途と社会慣習の取り込みに努める。「ユダヤ人はその社会慣習の一部として，黒人即劣等人種という伝説を教え込まれ，それを鵜呑みにしすぎる。他方黒人も，経験上ユダヤ人即守銭奴という伝説を打ち消せるような事例を見出していない。このようにしてアメリカの白人は，同時に二つの伝説を役立てている。つまりこれら両少数民族を分裂させて，支配するのだ[7]。」黒人もユダヤ人も生活が逼迫していて，相互理解のゆとりなどもてない。ハーレムの子供たちはいじけた育ち方をして，成長しても身の置き所に窮する有様だから，驚くべきは，これほど多くの者が破滅したということではなく，これほど多くの者が生存しているということだ。「黒人があるユダヤ人を憎むとしたら，その相手がユダヤ人だからではなく，白人だからであり，ユダヤ人が自分を裏切るとしたら，それはユダヤ人の伝統ゆえでなはなく，彼が居住している国の伝統ゆえである。社会にスケープゴートが必要であるように，憎悪にはシンボルが必要だ。ジョージアには黒人が，ハーレムにはユダヤ人がいる[8]。」

ボールドウィンは，ハーレムの冷酷なユダヤ商人に怒りをぶつけたが，仲良く付き合っていたユダヤ人の学校友達もいて，彼らを自宅へ招こうとすると，偏執病を患っていた継父に厳禁される。ボールドウィンの才能を認めていろいろと気を配ってくれる好意的な白人女教師にたいしても，父親は感謝でなく警戒心だけを示す。幼少年期のこのような辛い経験もあって，彼は，ユダヤ人や白人に無条件で心を閉ざしてしまう黒人側の頑迷固陋に批判的だった。「アフリカの遺産」を強調する戦闘的な白黒分離主義にも冷淡だった。これがエルドリッジ・クリーヴァーの反発を招く。「〈(白人を憎み，恐れたからといって)黒人が好きだということにはならない。たぶんレンブラントを生み出せなかったためだろうが，むしろ彼らを軽蔑する〉と彼は言うが，この愛憎間の心理的距離は，自動的に微笑と嘲笑の差となり得よう。」また彼が同性愛者だったことにふれ，「白人が彼から男らしさを奪って，むずむずしている頭蓋の中心で彼を去勢してしまった」と極言する[9]。以来彼の一切の愛は白人性に注がれ，返す刃で憎悪を黒人性に向けた。このいわば人種的な死願望に駆られて，彼は反乱奴隷ナット・ターナーに似た主人公が登場するリチャード・ライトの「抗議小説」(*Native Son*) や，人種的障壁の打破を唱道したノーマン・メイラー

Hosei University Repository

の「白いニグロ」に酷評を加えたのだという。

死と背中合わせの黒人の生きざまに人間実存の原型を見出し，自ら「黒人化した」高貴な野蛮人，ヒップスターに反体制の先鋒的役割を期待したメイラー論文は，たしかにボールドウィンの反発を招いた。何よりも「白いニグロ」という表題に抵抗感があり，いまごろになってこんな古臭い黒人像が借り物の衣装をまとってしゃしゃり出たことに憤慨したからだという。「この上ない善意をもってしても，〈白いニグロ〉の意味を了解するのは無理だろう。実際このエッセイが，『裸者と死者』や『バーバリ海岸』の著者によって書かれたとはとうてい思えなかった[10]。」オーガズムの秘儀など，結局生と愛の恐ろしさを回避する方法にすぎず，より「ヒップ」に，より「ビート」になろうとするあまり，生を全面的に否認し，幼稚な愛の夢の実現を図って，結局捨て鉢的な暴力に訴えるしかない。小説家が「中心的な責任を逃れようとして築いた幻想構造は，砦でなく牢獄として機能し，彼はそのなかで滅びるのだ[11]。」

ボールドウィンにとって，作家の「中心的な責任」とは何か。彼が砦とした非幻想的な精神構造は，いかなるものか。「われわれは，自分の内部で直面し得たものだけを，他人の内部で直面し得る。自己凝視を通じてほかの人々を理解しようとするこの力次第で，われわれの知恵や同情は，いかようにも伸びて行く[12]。」ここでボールドウィンのいう同情とは，通り一遍の憐れみではなく，むしろ人種，国籍，宗教，社会的地位などの別を超えた，もっと普遍的な，人間性をめぐっての共感という意味にとるべきだろう。従って白人が黒人にかける同情だけでなく，黒人が白人にかける同情も存在し得ることになる。ボールドウィンが広範な白人読者層に受け容れられているのも，彼なりに白人の「体験を解く鍵」を見出して，精神的に対等な立場で白人に語りかけているからだろう。「白い黒人」に反発した彼も，「新しい黒人」とともに「新しい白人」が生まれつつあることは認識しており，これら両人種の精神的覚醒者たちが，アメリカの特殊な歴史的事情に則って，人種問題を単なるアメリカの恥部としてでなく，むしろアメリカが収めつつある一つの成果として，世界に示し得る日がくるだろうという希望を掲げている。しかし「ぼくが黒人なのは，君が自分のことを白人と思っているからにすぎない」という彼の一言からも明らかなように，けっして生半可な妥協で白人の歓心を買うことはなく，抗議の姿勢は崩れない。ただ白人と黒人の接近について，硬軟自在の弾力的な論議を積み重ねるのだ。非道な白人を憎悪し，復讐心を燃え上がらせるのは当然だ，と

Hosei University Repository

いう硬直した姿勢に黒人が固執するかぎり，白人側は反省の色を示すまい。憎悪で打ち込んでくれば，憎悪で切り返すほかないからだ。

異人種間交渉の基本的な姿勢はどうあるべきかについて，ボールドウィンは至言を残している――「黒人だからという理由でわたしを好きになる人も，また（黒人に生まれついたという）同じ偶然の中に軽蔑の理由を見出す人も，わたしは好きになれない[13]。」単なる黒人，単なる黒人作家にはなりたくないと考え，両人種の悩みが噛み合っている平面で互換性のある真実を探求しつづけたこの作家ならではの，柔軟な精神的境位といえる。文中の「黒人」を「白人」と置き換えても通用し，個人間だけでなく，集団間にも適用できる。白人優位を固守しようとして，白人がでっち上げた荒唐無稽な黒人観の数々の中に，むしろ白人自身の深層心理の表れを見出し，逆手をとるかたちで，白人の反省を迫った彼は，たしかに従来の一方通行的なアッピールを超えていた。しかし彼のアッピールは双方向性だから，黒人がでっち上げた荒唐無稽な白人観にも反省を迫ることができる。こういう精神的覚醒者は，たとえ黒人であっても，いや黒人だからこそ，憎悪に駆り立てられた密集隊形の黒人至上主義者，人種分離主義者にとっては目の上の瘤となろう。

2.2. エドワード・ルイス・ウォラント（『質屋』）

1961年といえば，アイヒマン裁判の進行とともに，世界中がホロコーストについて認識を深めていたし，またアメリカ国内では，ケネディー大統領の就任とともに，一連の政治的，社会的改革運動がその緒につき，とりわけ人種隔離と貧困に抗議する黒人の非暴力示威行動が徐々に成果を収めつつあった時期で，新進気鋭のユダヤ系作家エドワード・ウォラントが小説『質屋』を世に問うたのは，まさにその年であった。アウシュヴィッツの生存者たる元大学教授ソル・ナザーマンが，氷のように凍てついた精神状態のまま，姉バーサの一家を頼って渡米し，生活のためにハーレムで情無用の質屋となる。やがてそのハーレムもアウシュヴィッツ的な悪の支配体制に絡めとられていることを悟り，収容所での陰惨な被虐体験が果てしなく記憶に蘇って，半狂乱の状態に陥る。ヒスパニック系の助手が不良仲間を誘って押しこみ強盗を図るが，なんとその助手が彼の身代わりとなって仲間に射ち殺され，この突発事件で彼の内面を凍てつかせていた氷塊が解け始める。ホロコーストと黒人がユダヤ人に及ぼした負と正の心理的影響を絡めたこの作品は，心憎いほど時宜に叶っていたから，

Hosei University Repository

当然映画化の対象にもなった。

ソル・ナザーマンは，アウシュヴィッツに運ばれる貨車の中で息子を死なせ，収容所の中で，愛妻が親衛隊将校に陵辱されるところを腕ずくで目撃させられ，自身も人体実験で骨の一部を切断されている。以来彼の記憶は過去の生者，つまり死者に独占されている。同居している姉バーサ一家の浅薄な「アメリカ的」生活につきあい，店の常連である土地の零落者相手に質札を切るのはやむを得ないとして，それ以外のどんな人間関係からも逃れたいというのが彼の願望だ。同じ収容所の生き残りであるテシー・ルービンと性関係を持つが，生きる意志を喪失した者同士の捨て鉢的な行為でしかない。質屋の経営者として高収入を得ているから，姉一家，そしてテシーとその義父も，彼が生活の面倒を見ている。質屋の経営者といっても，ムリリオという黒人ギャングが資金源であり，ソルは非合法所得の隠れ蓑として利用されているにすぎない。1ドルでも多くの値をつけてもらおうと哀願する客に，最安値の質札ですげなく反応する彼は，ハーレムの貧乏人に君臨しているかにみえて，実は黒人ボスの支配下にある。収容所には，仲間の囚人を束ねる牢名主的な「カポ」がいて，所内支配体制の仲介役を果たしていた。ソルはまさにハーレム暗黒街の「カポ」を演じていたわけだ。やがて彼の脳裏で，この黒人ボスが収容所の親衛隊将校と二重写しになる。

彼は真の生活を死者の間に求めており，殺された家族や仲間のことを夢見るときにそれは果たされる。プロットはハーレムのなかで進行するのだが，折にふれ収容所の追憶でその進行が瞬間的に遮られる。拭い去れない過去の烙印が，間欠的に意識の表面を焦がす。映画化された「質屋」では，ナザーマンとムリリオとの間の緊張が高まってクライマクスに近づくと，このフラッシュバックがさらに持続的となって進行中のメイン・プロットにのしかかる。この重圧ゆえに，親族や，客や，店員や，彼に好意を抱くソシアル・ワーカーの白人女性と，ソルの間には，異次元間ともいえる精神的距離が介在していた。

反人間的とは，他人との対話や関係を拒むことである。沈黙と隔絶への抗しがたい引力は，この作品で最も頻繁に繰り返されるテーマといえる。ソルを助けようと善意の努力を重ねる上記のソシアル・ワーカー，マリリン・バーチフィールドが，あくまでもつっけんどんな彼に話しかける場面を引いてみよう。

「ソル，夕食にきていただけないかしら」

「ノー・サンク・ユーだ」外国語といえばこの三語しか知らないかのよう

Hosei University Repository

に，彼は言った。……

「ああ，お忙しいのね。じゃ今週の，そうね金曜日はどうかしら。ご都合はいかが」

「そんなことしても意味ないよ」

「おっしゃっていることが分からないわ」

「分からないか，じゃもっと分かりやすく言おう。われわれの間のどんな関係にも意味はない，まったく意味はないんだ」と彼は繰り返した。

「……でもわれわれの関係には意味がありそうな気がするの。すくなくともわたしにとってはね。わたしはあなたが好きだし，あなたといっしょにいて話し合うのが楽しいのよ……」

「いいか，どういったらいいのか……まあやってごらんなさい。あなたは思いやりのある人だ。ただぼくと親密になろうなんて考えてはだめだ。君のためを思って言ってるんだよ。」ちょっと間を置いたあと，彼の声は荒々しくなった。「君は死体愛好の罪を犯してしまうだろうよ。死者を愛するなんて淫らなことだ[14]。」

心優しく，何事にも寛大なマリリンだが，自分が三次元的な言葉で四次元的な現象に反応していることを知る由もない。ソルが立てこもっている世界では，人間性に基づく一切の価値観や動機や情動が停止しているのだから，対話や対人関係に胸襟を開けといっても無理な相談だろう。

質屋の店員ヘスス・オルティスも，親愛と尊敬の念からソルに何とか接近を図ろうとするが，微笑みひとつ返ってこない。それでも純金の鑑定法は何とか教えてもらえたし，ユダヤ人が質屋業で他の追随を許さない秘訣についても，ぜひ聞かせてほしいと訴える。

「われわれの商売の秘密か。教えてやろう。まず数千年の歴史だ。古い栄光の伝説しかない民族なんだよ。耕す土地も，狩をする森も何もない。一箇所に長居をしないから，地理学も，軍隊も，土地の神話もない。頼れるのはちょっとした頭と，そして貧乏のどん底でも自信を与えてくれる古い栄光の伝説だけだ。だがこのちょっとした頭が肝心要なんだ。羊毛でも，絹でも，木綿でも何でもいい，買った布を二つに切って少しでも高く売る。それでもう少し大きな布を買い，三つに切ってまた売る。儲けても食べ物を増やしたり，子供におもちゃを買ったりしない。すぐ買えるだけの布に代えるんだ。それを何百回も繰り返しているうちに，畑を耕す気はなくなってしまう。土

Hosei University Repository

地も欲しくなくなる。同じ商売を二千年も繰り返していれば，自分にも分かってくる，商人の血筋だっていうことがね。そりゃいろいろと呼ばれるさ，陰で儲ける奴，高利貸，質屋，魔法使いその他もろもろ。そのころにはもう本能になっているさ。簡単だろ。ソル・ナザーマン著『商売成功法』一巻の終わりだ。」ここで彼は氷の微笑を浮かべた[15]。

求められるままに，金儲けのコツは教えたが，ユダヤ人の苦悩について，とりわけホロコーストについてヘススを啓蒙しようという気持ちはさらさらない。ヘススに「その腕の刺青は，なんていうんですか」と聞かれ，「俺が属している秘密結社のさ。おまえには入れないだろうな，水上歩行でもしないかぎり」と答える[16]。ヘススは英語読みにすると「ジーザス」つまりイエスのことだから，「おまえがほんとにイエスなら」というあてつけかもしれない。いつか商売のことを教えてやるという約束をしていたから，上の名講義はそれを果たしたまでのことだろう。「いい先生ですよ，最高の先生だと思いますよ」とヘススは感激の極みだった。

やがて黒人ボスの正体が判明し，つくづくこの商売に嫌気がさしていたソルは，「私は先生の弟子ですから」というヘススに「おまえなど弟子でもなんでもない」と言い放ち，押しこみ強盗の機会を狙っていた不良仲間のもとへヘススを走らせてしまった。質屋がハーレム住民から強奪しているのだから，強奪されたものを奪い返して何が悪い，という単純な名分ではあるまい。質屋に寄せていた敬愛の情を裏切られたヘススは，金欲しさゆえに不良仲間と組む必要と，この質屋からもっと商売のことを学ぶ必要のジレンマに悩んだはずだ。金庫から金を奪うのはかまわないが，質屋の命を奪うことだけは止めろと，仲間にも繰り返し注意している。にもかかわらず，仲間の一人が，金庫の前を退こうとしない質屋に発砲しようとしたため，影に隠れていたヘススが身を挺してソルを救った。

ヘススのいわば殉死にソルが打ちのめされたとき，彼の内奥を凍てつかせていた人間不信の完璧なニヒリズムに亀裂が生じた。この癒しのプロセスは，ヘススの愛人で売春婦のメイベルから，黒人ボスが売春組織の元締めであることを告げられたときに始まる。彼の脳裏で，金を無心するため目の前で裸になったメイベルの姿と，親衛隊将校に陵辱される愛妻の姿が重なる。ヘススには金だけがこの世で絶対的なものだと教えたが，いまや売春組織の汚辱と恐怖にまみれた金を運営資金として受け取るわけには行かない，殺したければ殺せ，と

Hosei University Repository

黒人ボスに抵抗し，当然死の脅迫に曝される。死者にしか心が通わない男に，死の脅迫は無効である。この毅然たる抵抗は，売春組織に縛られた生者への同情がきっかけだから，収容所の悪夢的記憶が一気に現実とつながり，ホロコースト生存者特有の自閉的麻痺状態を緩解させる端緒ともなり得よう。

ヘススは不良仲間と合流する前に，教会の中を覗き，十字架のイエスに目を留める。「彼も質屋と同じくユダヤ人じゃないか，こいつぁお笑いだ[17]。」彼の脳裏では，十字架のイエスと，殺すつもりはないにせよ，殺される可能性はあるソル，青い刺青をさらして十字架にかけられたソルの姿が重複する。プエルトリコ人ヘスス，つまり「ジーザス」が，ここに「ナザレ人」イエスと類似した名前のナザーマンというユダヤ人と内奥のどこかでつながったとも考えられよう。ヘススの死で，凍てついていたソルの感情は解け始めた。

「何かが彼の中から崩れだしていた。彼の身体に，何か大きな傷から流れたものが満ち満ちているようだった。突き上げるような苦痛が彼を焼いた。赤裸々のまま皮膚を剝がれたような感覚で，彼はほつれたテントのように瀕死の若者の上に覆いかぶさった。……それから，（ヘススの母親の）乾いた噎せるような泣き声が，だんだん大きくなって，質屋の耳に溢れ，彼に迸り，彼を弱らせ，もう自分には関係ないと思っていたあの涙の海へ彼を引きずっていった。……麻酔の痺れがすべて消え去った。空気が生傷と接触することに，恐ろしさを覚えた。この大きな苦悶の感覚は何だったのか，何のためだったのか。神よ，いったいこれは何だったのか。愛なのか。ほんとにこれが愛だろうか[18]。」

間接にはマリリンの奉仕的精神，直接にはヘススの犠牲的精神で，ソルは失っていた人間性を回復できたのだから，キリスト教徒とユダヤ教徒，黒人とユダヤ人の間に緊張と葛藤だけでなく，融和の希望と協調の可能性も見出せるのではないか，という発想はいささか楽観的な飛躍かもしれない。最後の悲惨な急展開でソル・ナザーマンは過去の呪縛から救済されたと結論づけるなら，それはホロコーストの悪の全容に疎いからで，腕に刺青された囚人番号と同様，非人間化の極限まで突き落とされた苦悶の記憶は終生ソルにつきまとうはずだ，という考え方は，とくにユダヤ人の間では根強いものがあろう[19]。作品を通じてホロコーストの残虐をあれだけフラッシュバックされると，非ユダヤ人でさえ，ソルの前途に一抹の不安を覚えずにはいられないのだ。

Hosei University Repository

2.3. ソール・ベロー（『サムラー氏の惑星』）

黒人，ユダヤ人，その他の白人が密接に協力し合っていた初期の公民権運動から，やがてストークリー・カーマイケルの呼号に応じて「ブラック・パワー」運動が台頭し，人種平等会議（CORE）や学生非暴力調整委員会（SNCC）に加わっていた白人，その中でも高い比率を占めていたユダヤ人が指導的地位から追い立てられた。ブラック・ナショナリズムの高まりにつれて，黒人も他の民族集団同様，自らの拠って立つべき伝統を必要としたから，先祖たるアフリカ人の精神的中核としてアラーの名がアメリカの地で蘇った。リロイ・ジョウンズ（イマム・アミリ・バラカ）を代表とする分離主義急進派がイスラムに改宗してアラブ諸国との連帯を表明し，時折しも中東戦争の第3ラウンドたる「6日間戦争」の勃発と重なったから，黒人の反ユダヤ的感情が顕著な形で国際的な反シオニズムと結合してしまった。かくして黒人は，精神面では合成から純粋培養へ，また行動面では提携から独断専行へと，いずれも自己主張に傾いた。

黒人とユダヤ人の関係は，「甘く苦い出会い」（“sweet-bitter encounter”）と呼ばれていたものだ。両者の「甘い」出会いを象徴するのは，ジョージ・ガーシュインやアーヴィング・バーリンによるユダヤ音楽と黒人音楽の合成だろうし，公民権運動絶頂期における両者間の献身的相互提携だろう。当時南部人種主義者のテロに倒れた3名の学生活動家中，2名がユダヤ系であった。「苦い出会い」といえば，やはり階級的格差ゆえの嫉妬や憎悪だろう。ニューヨーク，シカゴなどの大都会では，黒人が内心つきたいと思っている教育，社会福祉関係のポストの大半がユダヤ系に占められている。ブラック・ナショナリズムの一環として黒人隔離教育が主張され，暴動回避最優先のニューヨーク市当局は，実施の方向で検討にかかったが，ニューヨークの公立学校教員中黒人はわずか1割で，ユダヤ系が6割を占めていたから，隔離教育が実施された場合，多くのユダヤ系教員が路頭に迷う公算は大であった。当然教員組合はストに突入，激しい相互誹謗が延々と続き，黒人のユダヤ系に対する不信と憎悪は決定的となった。

その後差別撤廃措置で設けられた入試や就職の黒人枠をめぐって，それを不公平な逆差別とみなす白人側からの訴訟が相次ぎ，これに同調するユダヤ人は少なくなかった。人種別割り当て制が適用されたら，全人口の2.5%にも満たないユダヤ系は，著しく不利を被る。ポドレッツ，クリスタルといったユダヤ

Hosei University Repository

系新保守主義者たちがイスラエル支援も兼ねて，ユダヤ系の権益主張に乗り出し，教育，福祉などで黒人に過度の優遇措置を施せば，彼らの自助の精神を損なうなどと，つねに弱者の側に立つユダヤ的伝統と裏腹の発言をくりかえし，黒人の憤懣をいっそう募らせた。ベトナム戦争中の殺伐として陰鬱な大都会の雰囲気，反戦運動がもたらした過激なリベラリズム，「法と秩序」に対する反発，犯罪の急激な増大，そのなかで一部の黒人が「ハイル・ヒトラー」を呼号するなど公然と街頭でくりひろげる反ユダヤ的言動——このような時代背景がユダヤ系作家たちの反応を引き起こさないはずはなく，ベローの『サムラー氏の惑星』(1970) やマラマッドの『借家人』(1971) はその代表格となろう。

ベローの作品の主人公アーター・サムラー氏とは，オクスフォード出身のユダヤ系ポーランド人で，1920年代と30年代には母国のジャーナリストとしてロンドンに滞在，H. G. ウェルズが主宰する文化人サークルの一員だった。大戦勃発の直前に妻と娘を伴って帰国，娘は修道院に預けたものの，夫婦は囚われの身となってしまった。ホロコーストのさなか，収容所で妻を庇おうとして銃の台尻で殴られ，片目をつぶされた。集団処刑で妻は帰らぬ人となったが，彼自身は奇跡的に被弾せず，折り重なった死体の山から這い出し，森に隠れてパルチザンとなった。その間ドイツ兵一人を射殺したこともある。ポーランド人のパルチザンが，ユダヤ人をソビエトの手先とみなして殺しはじめたため，共同墓地の廟に潜んでやっと生き延びた。ドイツの難民収容所にいた彼と娘は，甥のイーリア・グルーナー医師に救い出されて，ストーリーが始まる時点では，すでに20年間をニューヨークで過ごしている。分裂症気味の娘シューラとは別居し，姪のマゴットのアパートから市立図書館に通う毎日だ。生活の面倒はすべて甥イーリアにみてもらっている。

アーター・サムラーに優しい配慮を寄せる一族の大黒柱イーリア・グルーナー医師は別として，周囲の親族も友人も多かれ少なかれ精神異常の症候を呈しており，そもそもニューヨークの市街全体が恐怖と腐敗の臭気を放っている。公共施設の破壊，追剝ぎ，荒稼ぎ，猥褻行為，暴動，デモ等々。アーターはバスの中でスリ行為の現場を目撃する。「スリの方もサングラスをかけていた。キャメルヘアのコートをきわめて品よく着こなした逞しい黒人で，美しい金縁をあしらったリンドウ色の眼鏡がサムラーの方を向いていたが，顔面はといえば，大きな獣の図々しさを示していた[20]。」警察に通報しようと公衆電話を探すが，どれもこれも壊されており，トイレ代わりになってもいた。帰宅後改め

Hosei University Repository

て電話したら，そんな通報はあまりにも多すぎて，いちいち構っていられないとのこと。翌日アーターは，またバスの中で無抵抗の老人に密着して悠々と強奪中の同じ黒人スリに出くわす。ずっと注視していたことを気づかれまいとしたが，スリはアパートまで彼を尾行し，廊下の壁に彼を押し付けて，「ピューマのように」ものも言わず，自分のズボンのジッパーを下げ，大きな卵形の睾丸とともに「チューブか蛇みたいな」ペニスを引き出して誇示した。「その示し方は，不可解なほど確信に満ちていた。堂々としていた。それから〈証明されるべきであったもの〉（*Quod erat demonstrandum*）はズボンの中に戻され，サムラーは釈放された[21]。」

実はこの一物誇示による警告を受ける前に，アーターはコロンビア大学で1930年代の知的状況について講演をしており，そのなかでオーウェルの過激派批判を引用したら，ジーンズをはいたひげもじゃの若者が立ちあがって，「オーウェルはスパイで，病的な反革命家だ。……こいつの話なんか聞くことはない。きんたまが干からびて，死んでいる。アレがもうできないんだ[22]」と怒鳴り，アーターは講演を切り上げるほかなかった。外に連れ出されたサムラーは，ワイマール共和国でそうだったように，知と美の殿堂が不条理，野蛮という悪魔に手を差し伸べていると痛感した。彼はあの黒人スリにも，ニーチェの超人，ルソーの高貴な野蛮人，ダーウィンの生存競争勝者をみてとる。一切無言で傍若無人，王者然たる瀟洒な服装，顔面の獣的な厚かましさ，と彼の特徴をあげれば合点が行こう。アパート玄関口での彼の狼藉は，フロイトのセクス・パワー中心主義を体現したものでもあろう。

黒人スリにかかわる一部始終を身近な人々に語るだけで，何も手を打てないでいたところ，目が不自由な彼のために朗読役のアルバイトをしたこともあるフェファーという学生が，小型カメラで犯行中のスリを撮影してしまった。入院中のイーリア・グルーナー医師を見舞いに行く途中，サムラーは車内から，スリがバスのバンパーにフェファーの首を押さえつけ，カメラを奪おうとしているところに出くわした。集まった通行人に助けを求めたが無反応で，やむなくたまたま目にとまった元娘婿のアイゼンに何とかしろと訴える。イスラエルからやってきたばかりのこの男は，やたら暴力を振るいたがる殺人狂的な精神異常者である。ちょっと渋っていたが，やがてアイゼンは銅製のメダルがいっぱい詰まっているラシャ布の袋でスリの顔面を右と左から二度猛撃を加え，さらに頭蓋骨めがけて止めの一撃を加えようとするところで，サムラーは烈しく

Hosei University Repository

彼を制止する。パトカーが近づいたのを機に，病院へ急行したが，時すでに遅く，敬愛する甥は故人となっていた。

黒人スリとアイゼンに共通するものは，両者の歴然たる獣性で，その部分だけが拡大強調されている。サムラーの制止に不満なアイゼンはまくしたてた——「こんな奴は一度だけ殴ったってダメです。やるんなら思いっきりやらなくちゃ。さもなきゃこっちがやられるんだ。……やるんならやる，やらないんならやらない，どっちなんです，さあ答えて[23]。」サムラーは，アイゼンの言葉のなかに，自分も戦時中森の中で体験した本能レベルの論理を感じ取っている。その同じ論理で，彼は命乞いしていた丸腰のドイツ兵を射殺した。単純明解なアイゼンの論理は，魅力的でさえある。しかしこの一か八か的な行動で，人間は自らの複雑性を捨象され，ついには狂信的単一路線に誘われてしまう。やがてサムラーは，メダル袋の猛打でひしげたスリの顔に思いを馳せる。「神経の基本的な機能に従って，このことが，30年前銃の台尻で片目をつぶされたこととつながった。息がつまり，ぶっ倒れる感覚，それを人は追体験できるのだろう，もしそうするだけの価値があれば[24]。」

この作品中で再三ライトモティーフとして出没する無名の黒人スリは，その沈黙とその超然かつ悠然たる犯行ゆえに最も不気味な存在である。片やこの上なく明晰で内省的なユダヤ人ホロコースト被害者と，片や獣性に満ち誇大妄想的なアメリカの黒人，そして片や狂った社会のあらゆる現象に疑念を抱く博学のユダヤ人著述家と，片や手当たり次第に女性や老人の乗客から金品を剝ぎ取る黒人スリ——この意識的な対置を生み出した近因は，やはりユダヤ人と黒人の間で増大していた摩擦と緊張にある。自立的な誇り高き民族集団としての黒人像の代わりに，ここで描かれるのは，ニューヨークの日常生活で作家が日ごろ見聞きしている暴力的で，盗癖があり，衝動的で，獣のように粗野な黒人である。ユダヤ人と黒人が共通点よりも相違点をより多く認め，相互協調よりは相互非難に傾きがちな現状は否定できない。黒人の犠牲によってユダヤ人が愛に目覚めるといった『質屋』の相互融和的テーマは，もはや憫笑を招きかねない。理解から無理解へ，透明から不透明へ，信頼から不信へ，統合から分離へと，両民族集団の亀裂はますます修復困難になっている。しかしサムラー氏が，過激派白人の気品なき狂気よりも，黒人スリの気品ある狂気にまだある種の魅力を覚えていたことは，注意に値するし，自分がナチに片目をつぶされた体験と，黒人スリがナチ的イスラエル人の手で危うく殺されるところだった事

Hosei University Repository

件とを脳裡で重ね合わせていたことも，忘れてはなるまい。

2.4. バーナード・マラマッド（『借家人』）

1958年に刊行されたマラマッドの短編集『魔法の樽』のなかに，「天使レヴィーン」という幻想的なストーリーが含まれている。ユダヤ人マニシェヴィッツは火事でクリーニング店を，戦争で一人息子を失い，娘は「ろくでなし」と駆け落ちするという不幸続きで，おまけに本人は腰痛に悩み，働き者の妻はみるみる憔悴して，お先真暗であった。そこへ山高帽をかぶった黒人の男が現れ，アレクサンダー・レヴィーンとユダヤ姓を名乗る。不審がっていたら，レヴィーンは食事前の祈りを朗々たるヘブライ語で唱え，自分は正真正銘の天使で，目下実習中の身だという。「神が天使を遣わされるとしても，なぜ黒人を」とマニシェヴィッツは納得せず，やむなくレヴィーンは立ち去る。すると妻が危篤状態に陥り，藁をもつかみたいマニシェヴィッツは，まだ不信の念を捨てきれなかったが，ハーレムへ急行してレヴィーンを探し回る。とあるいかがわしいキャバレーのなかで，「ユダヤの屑め，出てけ」と周囲の罵声を浴びながらついにレヴィーンをみつけ，「あなたは神が遣わされた天使にちがいない」と今度は真剣に窮状を訴える。ロウアー・イーストサイドへ同行したレヴィーンがアパートへ足を踏み入れるや否や，妻は快癒し，実習を終えた黒い天使は天国へ飛び去る。「すばらしいね，どこにでもユダヤ人はいるんだ」――こう漏らしたマニシェヴィッツにとっても，また作者マラマッドにとっても，1950年代後半当時なら，黒人とユダヤ人の一体感は，そんなに奇跡的でもなかっただろう。

その十数年後，1971年に刊行された『借家人』は，上述の短編と同じく，黒人とユダヤ人が幻想的な結末に導かれる寓話なのだが，今回は，ユダヤ人作家が作家志望の黒人の頭を斧で叩き潰し，黒人の方はサーベルでユダヤ人の下腹部をえぐって，ともに相果てるのだ。最後のページで家主のレーヴェンスピールの口から「神よ御慈悲を」という言葉がまずイディッシュ語で1回，英語で115回繰り返されはしても，これほど無慈悲な小説は稀だろう。殺人者同士の間で最後に交わされた怒号は，「黒人嫌いのユダヤ吸血鬼め」と「反ユダヤの猿め」であった[25]。作品の耐久性を測る尺度の一つは，10年後にもまだ部分的真実を告げているかどうか，にあるとされるが，黒人の反ユダヤ感情が尖鋭化している現在，「天使レヴィーン」と『借家人』のどちらに真実性があるか

Hosei University Repository

となれば，誰しもが後者に軍配を上げるだろう。前者の意味内容は歴史的に考えれば，結局ユダヤ人にとって黒人は抑圧的な意味での「ゴイーム」（異邦人）ではなかった，ユダヤ人は「ユダヤ共同募金」だけでなく「人種平等会議」にかかわっていた時期もあったということである。奴隷制に伴う罪の意識がユダヤ人にとって重荷ではないように，反ユダヤ主義の歴史的責任を黒人が問われることはない。ところが，『借家人』では結局黒人が「ゴイーム」視され，ユダヤ人と黒人がたがいに迫害を加え合っている。

公民権運動で共闘したといっても，ユダヤ人と黒人は，ちょうどこの作品の場合と同様，師匠と弟子みたいな間柄で，一部ユダヤ系パートナーの独善的指導は，心ある黒人活動家の憤懣を買うものであった。分離主義の台頭以後，とくにユダヤ系との摩擦が激化しているのは，逆差別問題など直接利害が絡む場合やアラブ側との連帯など政治的な動向もさることながら，ワスプに対抗するのは厄介だけれどもユダヤ人を脅すくらいは平気，といった非圧迫集団独特の狡知が働いているからでもあろう。ユダヤ人は，やはり歴史的先例にたがわず，白人支配層の身代わりとしてブラック・パワーに矛先を突きつけられた勘定だ。しかし問題の核心は，アメリカでユダヤ人は幸運であったが，黒人はそうではなかった，アメリカはユダヤ人にとって楽園であったが，黒人にとっては地獄であった，という否定しようのない事実で，これでは，ユダヤ人が黒人に同情をかけても，僭越の沙汰になってしまう。同情を示さないことは明らかに不正だが，同情を示すと，結局さらなる不正を重ねてしまうのだ。

作品の背景は，ニューヨーク市東31丁目の廃屋に近い，糞尿と塵芥と死んだネズミの悪臭を放つアパートで，ここに独りで住み着いているユダヤ人作家ハリー・レッサーは，小説第三作目の『約束された終末』に取り掛かってもう10年になる。第一作は成功したが，二作目は失敗，三作目のテーマは愛だというが，こんな孤立籠城の生活から愛の名作が生まれるはずはないだろうし，レッサー（Lesser）という姓からして，大成しそうもない。このぼろ家を取り壊して店舗向きのビルにしたいので，どうか引き払ってほしいという家主の願いを聞き入れず，あくまでも書き始めたこの場所で書き上げる，といって1万ドルの立ち退き金に目もくれない。そんなアパートの別室へ無断侵入しタイプを打ちつづけているのが，作家志望の黒人ウィリー・スピアミントだ。二人は用心深く接近し，しぶしぶ付き合いだす。作家同士の付き合いといっても，両者のレベルからいえば，師弟関係だ。ハリーはプロだから文章を磨き上げ，アメ

Hosei University Repository

リカ文学の伝統に則った彼のコメントには権威がある。ゲットーからやってきたウィリーは荒削りで，その不細工さが折角の素材を損なってしまう。「……黒いということを単なる色とか文化に終わらせず，憤怒を抗議とかイデオロギー以上のものに仕立て上げるための技法が，まだ身についていない。……レッサーからみれば，表現が不適切で，反復が多すぎるし，素材がこなれていない。配列，均斉そして結局焦点が定まっていない[26]。」

技法を極めたハリーといえども，ウィリーの無尽蔵とも思える情動エネルギー，その根底をなす下層黒人としての切実な苦悩に，一種の羨望さえ抱いただろうし，野心満々のウィリーとて，ハリーの熟達した技法には憧憬と嫉妬を禁じ得なかっただろう。両人のこの相互補完的関係が崩れたのは，思想的対立といった高次元な原因からではなく，ハリーが，あるいは体験拡充の願望に駆られてか，ウィリーの愛人たるユダヤ系の女性アイリーンを横取りした結果である。このアイリーンといい，ウィリーの黒人仲間といい，家主といい，いずれも筋立てを動かすための駒にすぎない。あくまでも両主人公の対話が本筋で，むしろ演劇的な構成だといえる。両主人公といっても，ハリーの心境的変化を中心にプロットが展開し，ウィリーの意識は最初から決定されている感じである。

「俺の感じてることを，あんたは違った風に感じてるんだ。あんたは黒人について書けやしない，俺たちの何たるかを，俺たちの感じ方をまったく知らないんだから。俺たちの感じ方は，あんたたちのとは違うんだ。このいまいましい国で俺たちはまだ奴隷でいるけど，もうこれ以上奴隷のままではいないぞ，と叫んでいる黒人の魂の文学を俺は書いてるんだ。レッサーよ，おまえの脳味噌が白いかぎり，分かりっこないよな」

「おまえの脳味噌が白いかぎりか。でもね，その経験が人間性にかかわっていて，ぼくを感動させるなら，そしたらきみはそれをぼくの経験にしてしまったことになる。それをぼくのために創造してくれたわけだ。普遍性を否定してもいいけど，いいかウィリー，それを廃止することはできないぞ」

「人間性なんてくそだ。何の特権も与えちゃくれない，何も与えちゃくれなかったぞ」

「芸術の話をしているんだろ，そんなら形式がしかるべき要求を出してくる。さもないと，秩序も，そしておそらく意味もあり得ないからね。ほかに何があり得ないか，きみは分かっていると思うけど」

Hosei University Repository

「芸術なんてくそ食らえ。芸術ってほんとは何だか知りたいか。この俺さまが芸術だ。ウィリー・スピアミントという黒人がだ。俺の形式とは俺自身のことさ[27]。」

黒人性が分かるのは黒人だけだ，黒人を理解するのに人間性も普遍性も無用無意味だというこの完璧なブラック・ナショナリズム。―民族全体をその信仰，権力，歴史とともに象徴する絶対的な形式といえば，トーテムだろうか。ウィリーは黒人性をトーテム化し，芸術を政治化してしまった[28]。激情をどれほど露わに表出させても，完全なステレオタイプでしかない黒人を主人公の一人に据えた小説は，失敗作のリスクを負うことになる。そのウィリーに復讐という人間的な反応を惹起させようとして，アイリーンというプロット展開の支点が作られた。この愛人をハリーに奪われた腹癒せに，ウィリーはハリーが十年来書き溜めていた原稿を破り捨て，ハリーはその返報としてウィリーのタイプライターを斧で叩き壊す。そして最後の相討ち。

マラマッドはウィリーのモデルとして誰か固有の黒人作家を念頭に置いていたのだろうか。リロイ・ジョーンズとかエルドリッジ・クリーヴァーなどきわめて戦闘的だった黒人作家を想起させるけれども，教養面，技法面ともにウィリーの比ではない。とすれば，黒人運動とくに分離主義者らの文献や政治活動から借用したとしか考えられない。つまりウィリーを作り上げた素材は，民族集団としての黒人そのものということになる。ウィリーの言い分を否定する黒人が，数多くいるとは思えないからだ。差別撤廃措置のお蔭で中流化した黒人たちでさえ，かつての仲間だった下層黒人への連帯感を失ってはいないし，彼ら自身の地位向上が，過去に各地のゲットーで勃発した抗議暴動の賜物であることを忘れていないからである。ウィリー的な精神状態あるいは信念で大多数の構成員が統合されているとしたら，やはりウィリーはトーテム的なのである。

アイリーンの一件で険悪な関係になるまでは，ウィリーも，落ちぶれ傷つき怯えていたゲットーでの幼き日々を痛烈かつ率直に書き綴っていたのだが，復讐の一念に駆られてからというもの，彼は「ポグロム」，つまりユダヤ人迫害を夢想するようになっている。ハリーが叩き壊したウィリーのタイプライターには，ユダヤ人殺戮を幻想した詩や散文が綴られていた。賃貸料徴収にきたユダヤ人悪徳家主を３人の黒人が刺し殺し，死体を食べようとするが，ユダヤ人の肉が美味しいわけはないと思い直して，「夜遅くシナゴーグへ行き，頭蓋帽

Hosei University Repository

をかぶってユダ公的な声を出して祈る。もしくはその代案として，シナゴーグを乗っ取ってモスクに変え，黒人らがハシディック・ダンスを踊る」といった内容だ[29]。彼は，ハリーをもはや自分より熟達した作家としてではなく，単なるユダヤ人とみなしている。こうなると，ウィリーに原稿を破棄されて，やむなく初めから書き直しているハリーの精神状態も，恐怖に駆られておかしくなる。「ポグロム」に曝されたかつての東欧ユダヤ人たちみたいに，ハリーも「自己防衛」（ゼルブシュッツ）に出ざるを得なかったのか。『借家人』は，外界から遮断された状態でユダヤ人と黒人が殺し合う，いわば閉塞恐怖症気味の寓話である。「天使レヴィーン」で人種融和に望みをかけたマラマッドは，それ以後急変した世相を反映して政治的不安のミニ黙示録を呈示した。「〈これでたがいに相手の苦しみを感じるのだ〉と作者は思った[30]」――この結末の一文は，相互接近への希望らしきものを仄めかしたつもりなのだろうが，1990年代に入ってもウィリー的な黒人の分離主義的主張は依然として根強く，マラマッドのこの作品が，オーウェルの『1984年』のように，古びたメタファーとして忘れ去られることは当分ないだろう。

黒人の分離主義者たちが，なぜ反ユダヤ主義を必要とするのだろうか。誰しもが，公民権運動時代にユダヤ人が黒人に寄せた積極的協力を想起して怪訝に思うだろう。黒人の新しい反ユダヤ主義は，ボールドウィンが述べているような「下からの」，つまりハーレムの貧民たちが搾取的なユダヤ商人に抱いたそれではなく，「上からの」，つまり外部への憎悪を扇動して「ブラック・パワー」の堡塁を固めようとする分離主義団体とそれを支援する知識人らが援用しているそれである。他民族集団と提携して共通の行政改革を追求しようとする人々と，黒人だけで真の人種的アイデンティティーを確立しようと主張する人々が，たがいに「ブラック・アメリカ」の代表権を競い合っている。後者に属する人々は，黒人を孤立させればさせるほど自分たちの権力が増大すること，そのためには黒人をその協力者から分断するのが最も効果的であること，を知っており，メディアを駆使して憎悪の使徒となる。なぜとくにユダヤ人を叩くのか。援助してくれた人を許せなくなる天邪鬼的な心理が人間にはあって，黒人とユダヤ人の関係には，この逆説が長きにわたってつきまとっているというのだ[31]。公民権運動や慈善活動でユダヤ人が黒人に差し伸べた支援もさることながら，ボールドウィンも指摘しているように，黒人とユダヤ人は，旧約聖書的な解放・救済願望を介していわば深層部で共鳴しているような面がある。

Hosei University Repository

このユダヤ的感化から黒人を脱却させることは，分離主義者にとって最優先の急務である。ファラカンが主宰する「ネイション・オブ・イスラム」がきわめて反ユダヤ的である所以はここにある。たしかに，黒人とユダヤ人との間にかつて介在した提携・協力関係が復活すれば，黒人分離主義運動の行く手に，最大の脅威が立ちはだかることになろう。つまり，黒人分離主義者の新しい反ユダヤ主義は，黒人とユダヤ人の歴史的な協力関係にもかかわらず，ではなくて，それゆえに生じた，ということになる。

《注》

1．『ソフィーの選択』（スタイロン）

（1） *SAPIO* 1995年3月23日号，20－22；*AERA* 1995年2月27日号，21－23。

（2） "Evil," *TIME* June 10, 1991, 43.

（3） Yad Vashem とは，ヘブライ語で "hand and name (monument and memorial)" の意味。600万人のホロコースト犠牲者を追悼するため，エルサレムのヘルツェル山隣接地区に設けられた祈念堂，博物館，文書館など一連の施設の総称。

（4） Emil Fackenheim, *God's Presence in History* (Harper Torchbooks, 1972) 70.

（5） James L. W. West III, ed., *Conversations with William Styron* (University Press of Mississippi, 1985) 232.

（6） *Ibid.*, 264.

（7） Richard L. Rubenstein, *The Cunning of History* (Harper Colophon Books, 1978) 53.

（8） Irving Louis Horowitz, "Many Genocides, One Holocaust?" *Modern Judaism* Vol. 1, No. 1, 82.

（9） Henry L. Feingold, "Determining the Uniqueness of the Holocaust: the Factor of Historical Valence," *SHOAH* (The National Jewish Resource Center, Spring 1981) 11.

(10) Gideon Telpaz, "An Interview with William Styron," *Partisan Review* (No. 3, 1985) 252-263.

(11) Elie Wiesel, *One Generation After* (Pocket Books, 1978) 11.

(12) Wiesel, "To a Young Jew of Today," *ibid.*, 220.

(13) *TIME*, April 3, 1989, 35.

(14) Irving Howe, "American Jews and Israel," *Tikkun* May-June 1989, 72.

(15) *William Styron's Nat Turner: Ten Black Writers Respond* (Beacon Press, 1968) *Cf.* J. L. W. West III, *William Styron: A Life* (Rondom House, 1998) 385-389.

(16) Philip Leon, "A Vast Dehumanization," A. Casciato and J. L. W. West III, ed., *Critical Essays on William Styron* (G. K. Hall, 1982) 263.

(17) William Styron, *Sophie's Choice*, (Random House, 1979) 247-48.

(18) West III, *Conversations*, 258.

(19) *Sophie's Choice*, 473.

(20) *ibid.*, 353.

(21) *ibid.*, 213.

Hosei University Repository

(22) *ibid.*, 153. Also *cf. Conversations,* 250.
(23) *Conversations,* 249.
(24) Rubenstein, *op. cit.*, 92.
(25) *Sophie's Choice,* 475.
(26) *Conversations,* 260.
(27) *ibid.*, 259.
(28) *Sophie's Choice,* 219.
(29) *ibid.*, 513.

2．黒人のユダヤ人観とユダヤ人の黒人観

(1) James Baldwin, "Negroes Are Anti-Semitic Because They're Anti-White", Paul Berman, ed., *Blacks and Jews* (Delacorte Press, 1994) 39.
(2) *ibid.*, 34.
(3) *ibid.*, 32.
(4) *ibid.*, 33.
(5) Baldwin, "The Harlem Ghetto," *Notes of a Native Son* (Beacon Press, 1962) 66.
(6) *ibid.*, 68.
(7) *ibid.*, 69.
(8) *ibid.*, 72.
(9) Eldridge Cleaver, *Soul on Ice* (Panther Books, 1970) 98, 101.
(10) Baldwin, "The Black Boy Looks at the White Boy," *Nobody Knows My Name* (Delta, 1962) 228.
(11) *ibid.*, 239.
(12) "Introduction," *ibid.*, xiv.
(13) Baldwin, "Autobiographical Notes," *Notes of a Native Son,* 9.
(14) Edward Lewis Wallant, *The Pawnbroker* (Harcourt Brace, 1961) 218-19.
(15) *ibid.*, 52.
(16) *ibid.*, 20.
(17) *ibid.*, 238.
(18) *ibid.*, 271-72.
(19) L. S. Delbo, *The Monological Jew* (The University of Wisconsin Press, 1988) 177-78.
(20) Saul Bellow, *Mr. Sammler's Planet* (Fawcett, 1971) 8-9.
(21) *ibid.*, 49.
(22) *ibid.*, 42.
(23) *ibid.*, 266.
(24) *ibid.*, 270.
(25) Bernard Malamud, *The Tenants* (Farrar Straus Giroux, 1971) 229.
(26) *ibid.*, 66-67.
(27) *ibid.*, 74-75.
(28) *cf.* Cynthia Ozick, "Literary Blacks and Jews," Paul Berman, ed., *op. cit.*, 63.
(29) *The Tenants,* 203.
(30) *ibid.*, 230.
(31) Henry Louis Gates, Jr., "Black Demagogues and Pseudo-Scholars," (http://

Hosei University Repository

www.wiesenthal.com./resource/Blackdem.htm) 3.